

怪文書、集めました

へか帝

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

続かない続き物をここに埋めておきます。

# 目次

	新大陸xダマグモキヤノン	1		
	第10の生徒(1)	7		
	第10の生徒(2)	20		
	第10の生徒(3)	31		
41	コーラちゃんかわいいヤッター!(1)			
50	コーラちゃんかわいいヤッター!(2)			
58	コーラちゃんかわいいヤッター!(3)			
67	コーラちゃんかわいいヤッター!(4)			
				コーラちゃんかわいいヤッター!(5)
				81
				六畳一間のアズールレーン
				88
				ブルーアーカイブと大忍び
				93



# 新大陸 X ダマグモキャノン

新大陸にダマグモキャノンがいる

新大陸。その海岸から、僅かに内地へと寄った場所に大蟻塚の砂丘はある。そこには、巡り続ける生態系から逸脱した異物が鎮座している。

それは球の形をしていた。

すり鉢状に窪んだ砂地の中央にて、下半分が地中に埋まっている。表面には鈍い黄土色の金属板が貼り合わられており、日射の光をガラガラと反射していた。

球体はあちこちから細長いパイプが上向きに生えており、天頂には、小さな環状の鉄輪が天使の輪のように伸びている。

そんな砂丘に鎮座する異質な物体に興味を示すモンスターがいた。

クルルヤツク。またの名を搔鳥。

二足歩行の恐竜のようなシルエットのモンスターで、空いた両前足で卵を抱えて持ち運ぶ習性のあるモンスターだった。

いつものように餌を求めて探索していれば、自然とその球体は目に入った。

はて、いつも食糧にしている卵とはなにやら趣が違う。

けれど丸いし、キラキラしてるし硬そうだ。大きさも丁度いい。

卵ではないかもしれないが、見ていて綺麗だし、巣に置いておけば外敵に襲われたとき武器になるかもしれない。

クルルヤツクは球を遠目に眺めながらそう考えた。

よし、持って帰ろう。

そう心に決めてずんずんと砂丘を降り、暗い金の卵を両の前足で掴んだ時——それは起動した。

ぷしゅーっ！ 無数のパイプから真っ白な蒸気が、天に向け勢いよく噴き出す。

想定外の球体の突然変異。それから、掴みかかった球の表面が想像以上の高熱だったことに驚いて、クルルヤツクは大慌てで飛び退いた。

その間にも球体は新たな動きを見せる。

地中に畳んで埋めていた四本の足を取り出し、立ち上がったのだ。

細い黒足を柔らかい砂地に突き刺し球状の胴体を持ち上げていく。そして最後の一本の脚を突き立てたとき、カン！ と甲高い音が鳴った。

球体の脚のうち、三本は針金のように黒く細長い形状で、だが残る一本が部品が複合した金属質の義足であり、金属音の正体はこれだった。

三つの黒足と一つの鉄芯で丸い体をぶら下げた金属生命体は、呑気に欠伸でもするようにもう一度、ぶしゅーつと深く蒸気を噴出する。

未知の生命体との遭遇。クルルヤツクは十分に距離を取ったうえで、それを呆然と見ていた。

それは通常であれば十分すぎる間隔距離。相手が繁殖期のディアブロスなどであれば少々心もとないが、ほとんどのモンスターから逃れるのに不足はない位置だった。

謎の物体を遠巻きから戦々恐々と眺めるクルルヤツクに、球体がアクションを起こ

す。

クルルヤツクは球体の動向をつぶさに観察し、警戒していた。

突進をしてくるだろうか。あの細い足と、小さくて丸い身体で？

ならば、飛竜のように口から灼熱の息吹を飛ばしてくるか。口すら見当たらないあの卵が？

そのどれでもない。

クルルヤツクの耳は、肉の裂かれる生々しい水音を聴いた。

それはまさしく、野生に生きる彼らが眼を疑う光景だった。

球体の生命体は下半球が二つに割れ、展開されたのだ。断面に見える明るいピンク色の肉の隙間から顔を出したのは、漆黒の円筒。

じじじ、と羽虫のような振動音を伴いながら、円筒から延びる真紅の光がクルルヤツクを貫く。

生き物のあるべき姿を逸脱した冒瀆的な容姿に、『おぞましさ』という未知の感情をク



ルルヤツクが抱いた瞬間。

黒い円筒の炸裂を見た。刹那、クルルヤツクは身体が灼けるような感覚と共に倒れ伏していた。

二発三発と続けて、高熱の何かに体を撃ち抜かれていく。訳も分からないまま必死に起き上がり、発達した後ろ脚のバネを全開に狭い洞窟の中へと飛び込む。

岩の壁面ごしに爆発音が等間隔に響いている。音に怯えて、足を引きずりながらクルルヤツクはさらに洞窟の奥へと消えていく。

目標を見失った奇怪な生命体は最後にもう一度勢いよく放熱して、引き裂いた下半身を閉じて球状の姿へと戻った。

そしてゆっくりと胴体を降ろし、また最初のように砂に半身を埋めたのだった。

「なんだ、あれは……！」

そして、それを見ていた者がいた。

新大陸のハンターの一人。調査団の者。偶然にも搔鳥と球状生命体の顛末を見届け  
ていた者がいた。

人工物と融合し、機械化した正体不明の怪虫。これの存在はただちに調査団の本部へ  
と伝わり、更なる調査活動の実施が決定。

過去の文献情報や既存の生態系、そして新大陸の植生。

そのどれにも属さない、まったく新しい異端の存在を指し。

——調査団および書士隊は、これを新たな『古龍』と認定した。

## 第10の生徒（1）

## 試験

雄英高校入学試験日。

転びかけたところを、通りすがりの受験生に”浮かせて”もらった緑谷出久は、女子と会話した喜びに打ち震えていた。

だが悲しいかな、一方的に声を掛けられ、返事もしないまま別れることを世間一般的に会話とは言わない。

しかしそんな些細なことは、当事者である出久には関係ない。入学試験直前に女子から”お互い頑張ろう”と激励をもらったとあれば、思わず立ち止まって雄たけびを上げてしまうのも仕方ないことだったのかもしれない。

だが、今日は倍率300倍超を誇る雄英の入学試験日であり、ここはその雄英の玄関先。当然ながら相応に混雑している。そんな中、ぼうと突っ立っていたらどうなるか。当然、人とぶつかる。

「うおつとと、ごめんなき……!?!」

後ろから誰かにぶつかられた出久は、すぐに自分の障害物つぷりに気づいた。慌てて振り向きつつ、謝罪の言葉を口にしようとして——思わず、息が詰まった。

「い、異形型の個性……!」

ベルト状の触手がミイラのごとくびっしりと巻きつけられた、繭のようなシルエットの巨体。顔があるであろう前面には口の裂けたハニワのような白い仮面が張り付けられており、肩と思わしき部分には琥珀のような物体が輝いていた。

まごうことなき異形型の個性。いや、だとしてもこれほど人の原型を留めないものは珍しい。

(ひよつとすると変身するタイプの個性か？ 少なくともこれが本当の姿じゃないよな。全身に巻いている帯は個性で発達した体の一部で、それで全身を覆い隠しているのか。だとしても、異形型の個性には何かしらのモチーフがある場合がほとんどだ。動物か

ら架空の生物までバリエーションには事欠かないけど、これはまるで予想がつかない。仮面も作りものではなくて体の一部にみえるし——)

驚きをよそに、外見からわかる情報で個性を分析する。

日がなヒーローを追いかけては、その個性のポテンシャルを考察するのが趣味としている出久の悪い癖だった。

「……? どいてほしい。小回りが利かないから」

「は、ハイ! ごめんなさい! どきます! 今!」

出久は裏返った甲高い声を上げつつ、無駄に機敏に道を譲った。相手はそのまま、出久を一瞥することもなく校舎へと歩みを進めて——

(……ない! 浮いてるー!?)

その生徒は、足元に丸い影だけを残し音もなく前進していた。空を飛ぶ個性もまた、希少なものである。ましてやそれが羽や翼によるものではなく、”浮遊”であれば尚更

だ。少なくとも、誰もかれも見慣れているものではない。

「そっか、小回りが利かないっていうのはそういうことだったのか……」

その背中を見送りながら、出久は一人で納得した。しかし見れば見るほど印象的な姿。小さく見えるほど遠くなっても、独特のシルエットからして一目瞭然。

ほんの一瞬の邂逅であったが、当分は忘れることができなだろうと出久は思った。この個性社会、いろんな姿を持った人がいる。それは今や常識であり、それが当然の環境で生まれ育った出久ももちろんそんなことは弁えている。でもあれは少々インパクトが強すぎた。

しかし、それを差し引いても。

「まさか、女の子だとは思わなかったな……」

一体誰が、あの物々しい仮面の奥から耳触りの良い柔らかな女声が聞こえてくるなどと予想できようか。

出久は、その外見とのギャップも相まって、彼女の声がしばらく耳に残っていた。



所変わって講義室。講義室とはいっても、そこは流石の雄英。大勢の受験生を全て収容できるケタ違いの広さは、いつそ舞台と違って差し支えないレベルだった。

『今日は俺のライブにようこそー!!! エヴィバディセイハイ!!!』

ステージに立つ首元に小型のスピーカーを下げたサングラスの男性が、講義室に余すことなく爆音を響かせる。

すかさずで合いの手を期待するように耳を澄ませるようなジェスチャーを取るが、今日の聴衆はライブに訪れたフォロワーではなく、胸いっぱい不安を抱えた受験生。誰

一人として、声を上げる者はいなかった。

『こいつあしヴィー!!! 受験生のリスナー！ 実技試験の内容をサクッとプレゼンするぜ!! アーユーレディ!?』

無論次の呼びかけにも誰一人として呼応しない。だが、それは彼が滑っていると、知名度が絶望的とそういう理由ではない。単純に場が悪い。

「ボイスヒーロープレゼントマイクだ！ ラジオ毎週聞いているよ感動だなあ……！」

現に出久はプロヒーローを目にした感激の声を抑えきれていない。

雄英の教師は全員が第一線で活躍するプロヒーロー。壇上に立つ『プレゼントマイク』もまた例外ではなく、重度のヒーローオタクである出久が興奮せずにいられるはずがなかった。きっとそういう生徒は出久一人だけではないはずだ。

（それにしても……）



出久は恐る恐る、ちらりと目線だけで隣の席に視線をやった。それだけで、見覚えのある黒い巨軀で視界の半分以上が埋め尽くされる。

(隣の席かあああー!!!)

遠くから見かけてもすぐにわかる容姿だなあなどと思っていたが、もちろん近くても全然わかりやすかった。視界の端に入れるだけで一目瞭然レベル。あまりに早すぎる再会であった。初めが良い出会いとは言えなかっただけに、出久は気まずさを感じずにはいられない。

(ど、どうしよう。何か声とか掛けた方がいいのかな？ でも何を?)

プレゼントマイクの説明や、他の生徒の質問、回答の内容をを耳に入れつつも隣の席の様子をうかがう。件の生徒の表情は、相も変わらず白い仮面そのものであり一切窺い知ることができない。

(個性のこととか、聞いてみても大丈夫かな……?)

ことヒーローオタクの出久にとって、個性の洞察や活用方法の考察もまた癖のようなもの。当人の得体の知れなさも相まって、出久は知的好奇心が刺激されていた。

だが、いざ声を掛けようとした瞬間、プレゼントマイクに質問を投げかけていた生徒が、質問の終了とともに振り向き声を上げた。

「ついでにその君！ 先ほどからぼそぼそとうるさい上に……次は隣の生徒にちよつかいでもかけようとしてもしているのか!? どういうつもりで雄英に来たんだ君は！」

「す、すみません……」

ひっそりと縮こまりながら、何とか謝罪の言葉だけは絞りだす。周囲からは小さな笑い声が聞こえるのを、出久はじっと耐えた。

その後も説明は滞りなく進み、やがて校訓“Plus ultra”の言葉を最後に締めくくられた。

次に案内されたのは試験会場。ビルの立ち並ぶ市街地であり、雄英の広大な敷地をふんだんに活用した実際の街と遜色のない景観だった。

不安から出久は周りの受験生の様子を見回す。

見れば持ち込んだ個性補助のアイテムを確かめる者から、ただただ雄英の敷地のスケールに圧倒される者など、他者多様であった。

その中に一つ。これまた見覚えのある、そして分かりやすすぎる人影を見つける。

(隣の席の人……！ 同じ会場だったのか！ なにか一言だけでも……)

例の生徒とは今朝から何度も縁が繋がっている。とんだ奇遇だが、軽い雑談くらいなら不自然ではないはず。そう思っただけで近寄ると、逆に先に声を掛けられた。

「……私の個性、そんなに気になる？」

「えっ？ いや、あのっ」

「……すぐにわかるわ」

『ハイスタートー！』

「え？」

会話の機先を制されたことでリズムを崩され、更に考えていたこと言い当てられ。そ

こちらから立て続けにプレゼントマイクの号令。ただでさえ入試という場で緊張しているのに、理解の追いつかないことが続き、出久が一瞬フリーズする。

『どうしたあ?!』 実戦じゃカウントなんざねえんだ「L A A A A A A A A A h h h h h  
———!」

……あ? 何の音

突如フィールド内に響き渡る女声のコーラス。それと同時に、玉虫色をした八角形の波紋が街の空に幾重にも重なって浮かび——

『だあああああ?!』

——街に、奈落がひとつ生まれた。

「え、えええええええ?!」

『オイオイオイ今年はいきなりぶちかましてくれるじゃねえの! オラ他の連中も急げ急げぼさつとしてるとポイント全部かつさらわれちまうぞ!!!』

「……ね？」

それは少し、茶目っ気のある声だった。



所変わって審査室では、試験開始から早くも審査官の間にざわめきが起こっていた。薄暗い室内には無数のモニターが浮かび、それぞれが別々の箇所、角度から試験会場の様子が映し出されている。

「今のは誰の仕業だ？ 悔しいがどういう『個性』で何をどうしたのかさっぱりだった」  
「そのモニターに映ってる異形個性の生徒だな。確か推薦組の候補生だったろう、覚

えているぞ」

モニターの一枚を拡大しつつ、審査官の一人が一枚のプロファイルを手に、内容を読み上げる。

「拒絶<sup>こぼみぜつ</sup>。個性『S2機関<sup>スーパーシレンノイド</sup>』。

体内に無尽蔵にエネルギーを生成する特殊な器官を持ち、”絶対領域”と呼ばれる極めて強度の高いシールドを展開できる個性……だそうだ。恐らく空に一瞬映った八角形がそうだろう」

映像が奈落の底を覗き込むようなアングルに変わる。地面に空いた大穴は空に見える。波紋と同じ正八角形をしていた。

「なら今のは地面と水平に発生させたシールドを上空から叩きつけたのか？ 範囲、スピード、展開速度、極めつけにあの破壊力。どれをとっても規格外だな。街の区画丸ごと一つづちぬいちゃまったぞ」

「初動も早かった。他の生徒を巻き込まない為に狙っていたか」

「ま、この時点の獲得敵Pで実技は合格確定だわな」

「他の生徒の敵Pが減るな。こりゃ荒れるぞ」

「だが、よく食らいついている。今年は豊作だな」

「どうかな、ヒーローとして真価が問われるのはここからだよ」

がやがやと楽しげに講評が交わされる中、審査官の一人がつぶやくのと同時に、試験会場にビルを突き破りながら巨大ロボットが現れる。

O Pの仮想ヴィラン。倒す倒さないの次元から外れた、圧倒的脅威。

当然ながら、受験生は全員蜘蛛の子を散らすように逃げだす。

そして逃げ遅れた女子生徒が一人と、それを見て躊躇なく飛び出す生徒が一人。

審査官たちから歓声が上がリ、救助活動Pの採点が行われる。

与えられたPは、60点。敵Pが一人の生徒によって大幅に独占された本年度の実技試験において、その数値は。

すなわち、実技試験合格確定者の二人目を意味していた。

## 第10の生徒（2）

春。雄英高校の新学期、その最初の一日である。

配属されたクラスは1—A。出久はその扉の前に立ち、胸を高鳴らせて今後共に歩むクラスメイトに思いを馳せていた。

特に、入試で顔見知った四角い眼鏡の彼とか、爆破に定評のある幼馴染あたりとは別のクラスだったら嬉しいなあと思いつつそーと扉をスライドさせて教室の様子が窺ってみる。

「机に脚をかけるな！ 雄英の先輩方に申し訳ないと思わないのか！」

「思わねーよどこ中だ端役が！」

が、残念、これが現実……！ 教室ではまさしく脳裏に浮かべた二人が言い争いをしている真つ最中だった。二人は何度か言い争っていたが、ふと、眼鏡の男子生徒が出久に気づいて声を掛けてくれたので、そのまま簡単に自己紹介を済ませます。この眼鏡の青年は飯田天哉というらしい。



「緑谷君、君はあの実技試験の構造に気づいていたのだな」

飯田の言う実技試験の構造とは、つまり救助活動Pを受験生に伏せた上での試験のことを指しているのだろう。何らメリツトの提示されおらず、他を省みるほど自身に余裕のない状況で、それでも誰かの為に行動できるか？ と、そういうことである。

あの実技試験は単純にヒーロー活動に欠かせない戦闘力や情報力の他に、いわゆる自己犠牲の精神、ヒーローになくてもならないそれを持ち合わせているかどうかを見るものでもあったのだ。

無論、出久はそんなことを知るはずもなかった。試験のときの裏を見抜いた上での打算的の行動などではなく、ただ「勝手に体が動いた」それに尽きる。

だが、だからこそだろうか。もう既にこの1-Aのクラスメイトの出久を見る目は、入試試験前に向けられていた嘲笑うような視線とは真逆のものだった。

「あー、そのモサモサ頭は！」

「………？」

僅かに聞き覚えのある声を聴き、出久は振り返る。視線の先にいたのはふわつとした髪型の女子生徒。校門の前で転ぶのを救ってくれたのにはじまり、遂には試験終了後にプレゼントマイクに獲得したポイントを譲渡できないかと直談判したあの女子生徒である。

それと、もう一人。嫌に見覚えのある白い仮面が見えた。あの異形型の個性の女子（？）生徒である。雄英のクラスを仕切る扉は、彼女の巨躯であつても余裕もつて通れるサイズであつた。そのためのバリアフリーである。雄英に抜かりなし。

（良い人！ 制服姿やっべえええええ！ あと仮面の人も！ 入試のときまんまだ！）

思わぬ再会による喜びと、再会した女子生徒のうらかなエネルギーに当てられ思わず赤面する出久。その一方で、仮面の生徒の姿を見て黙つてはいられない生徒がいた。まさしく飯田天哉その人である。

「君、制服はどうしたんだ！ 入試のときはまだしも、今日は入学初日だぞ！ 雄英高校では制服の着用が義務付けられているはずだ、それは異形型の個性でもあつても例外ではない！」

「……着てる。中に」

この時、密かにクラスメイトに衝撃が走った。

その容姿で女子なのかよ、と。

しかも声めっちゃ可愛いじゃん、と。

そしてすぐに、クラスメイト——特に男子生徒——に二度目の衝撃が走る。

異形個性の生徒が言うや否や全身に巻き付けた黒い帯をするとほどき始めると、その内から白くしなやかな肢体が露わになったのだ。雄英の制服に包まれているお、たわわに実ったものや、くびれた身体のラインがくつきりと見て取れた。

クラスの男子の大部分の想いがシンクロする。

そしてそのうちの一人、彼女の姿を血眼で凝視していた小柄な生徒がぼつりと一言。

「中身めっちゃエロ「やや！ これは失礼した、僕のはやとちりだったようだ！」

セーフ。留まることをしらない男子生徒のリビドーは真面目な飯田の声でかき消され、本人の耳に届くことはなかった。

それからしばらく、学校のチャイムの音と同時に廊下から無性ひげの目立つ男性が現れた。現れた、と言っても寝袋に入ったまま廊下に横たわった登場である。

そのままのつそりと寝袋を抜け出して静かになるのに〇〇秒かかりましたという定番の前口上のあと相澤消太と名乗った彼は、なんとこの1—Aの担任教師であるという。

およそ清潔感にかける、それ社会人としてどうなんだ的な風貌の相澤は、学校指定の体操服を突き出して言った。

「さっそくだが体操服着てグラウンドに出ろ」



言われるがままグラウンドに集まりながら担任に詳細を聞いただと、なんとこれから入学式もガイダンスもすっ飛ばして個性把握テストを執り行うという。曰く、ヒーローになるのにそんな悠長なことをしている時間はないそうだ。雄英が売りにする”

自由”な校風とは何も生徒だけに当てはまるものではない。相澤はそう言った。

行われるのは通常の体力テストと同じそれ。ただし、個性の使用を前提としその最大限を測るまさしく『個性把握テスト』。

初めに相澤がデモンストレーションとして、一人の生徒に個性全開でのボール投げをするよう指示した。選ばれた生徒の名は、爆豪勝己。とげとげしい髪とガラの悪い凶相が特徴で、その個性は『爆破』。

言われるがまま、大きく振りかぶった爆豪の手からボールが離れる瞬間、轟音と共に景気の良い爆発が巻き起こる。

「死ねえ!!」

およそソフトボール投げとは無縁と思われる掛け声と共に放たれたボールは、爆破のインパクトを伴い、尾を引くように煙を残して彼方まで飛んでいく。

その記録、まさに『705.2m』。

常人ではどう転んでも弾き出せないような数値に、クラスメイトから歓声があがる。それは今まで抑圧されていた個性を自由に使えるという期待からなのか、中には面白そうという声すらあった。

だが、そのクラスメイトたちの楽天的な思考、意識を象徴するようそのな発言は、合理性を重んじる相澤にとって決して見過ごせるものではなかった。

「面白そう……か。ヒーローになる為の三年間を、そんな心構えで過ごしていくつもりかい？」

……よし。なら、トータル成績最下位の者を、除籍処分としようか」

「「はああああ!?!」」

クラスメイトの全員が耳を疑うような発言だった。そしてその言葉が冗談の類ではないとわかると、みな一様に雰囲気が変わった。その顔色からも先ほどまで享乐的な要素は全く失せていた。

「入学初日ですよ！ そうじゃないとしても、理不尽すぎる！」

「理不尽一つ満足に越えられないヒーローに何の価値がある？ ここは最高峰のヒーロー養成学校。これから三年間、雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける。」

『Plus Ultra』。全力で、乗り越えろ」

## 第一種目は50m走。

ふくらはぎから煙を吹き猛スピードで駆ける飯田少年と、健脚によるカエル跳びで好タイムを出す女子生徒など、個性を駆使して好成績を残すのをクラスメイトは興味深そうに、そして不安そうに見ていた。他のクラスメイトの個性に興味がそそられるのは当然として、不安な表情の理由はやはり先の担任の発言が原因だろう。

問題行為や不正行為ではなく、純粋な“実力不足”が除籍処分理由に足る。足りてしまう。それが雄英の、最高峰のやり方。

「皆工夫が足りないよ。個性を使つていいつてのは……」

不可解なきらめき放つ妙な男子生徒がゴール地点と逆向きに立つて言う。出久は彼に見覚えがあつた。敵ロボットに立ちすくんでいた時、入試試験でビームを発射し救ってくれた生徒だ。その生徒は開始の合図の直前に、大きくジャンプした。

「(イ)う(い)う(と)きー！」

そう言い放ち、腰に巻いたからビームを照射したその生徒は、隣の生徒を容易に追いつ越すスピードでグラウンドを飛んだ。まさに個性の柔軟な使い方の手本そのものである。

惜しむべからくは、途中でビームが途切れて地面を転がり大幅に失速してしまったことだろうか。結局隣の生徒に追い越されてしまっていた。

「……参考になった」

その姿を仮面の眼窩で見つめていた絶は、インスピレーションを刺激されたらしい。何か思いついたようだった。順番が回ってきてスタート地点に立つ絶は、走ろうとする構えを見せず、ぼうっと立ち尽くすのみ。

そして、スタートの合図。

絶はそれとほぼ同時にその場で両腕を突き出すと、途端に腕が黒い触手に変じてゴール地点までめまぐるしいスピードで伸びていく。それは瞬く間にゴール地点に展開されたシールドにアンカーとして突き刺さる。衝撃で一瞬たるんだ触手はすぐさまにピンと張った。触手が収縮している。絶はその引き戻す力に一切抵抗せず、むしろその



力を利用し、自分の体を収縮のスピードでゴールまで飛ばす。

「2秒00。触手は超高速で伸縮可能、伸縮力も強力か」

「あんなフックショットみたいな使い方もできるのか……!」

なおゴールと同時に勢い余って自身の展開したシールドに盛大にぶち当たり甲高い防御音を鳴らしていたが、本人は何ともなさそうにしている。

見かねた金髪の生徒が、おそろおそろと絶に声を掛ける。

「な、今の痛くねえの?」

「めっちゃ痛い」

「痛いのかよ!?!」

しれつと言い放つ絶に、金髪の生徒は景気よくツッコんだ。

「冗談。インパクトの瞬間に別のフィールドで相殺した」

「お、おう。意外と冗談とか言うのなお前……」

その容姿と言葉少なな性格もあって敬遠されがちな絶だが、なんとなくクラスメイトは感じ始めていた。——こいつ、意外と面白いやつかもしれない。

「な、あんた名前は？ オレは上鳴」

「拒絶。ぜつちゃんと呼んで」

とつつきづらそうではあったが、話してみると悪いやつではない。むしろかなりフランク。勇気を出して声を掛けてみてよかったと思う上鳴であった。

続く種目においても、他の生徒と同じように個性をフル活用してトップクラスの記録をたたき出していく。白い腕を包帯状の触手に変じさせて握力計をがんじがらめにしたり、立ち幅跳びで浮遊したり、ボールをシールドに乗せて空輸 e t c e t c ……

最終的に出た結果では八百万 百に続き二位となった。三位は轟焦凍の名が表示されている。

## 第10の生徒（3）

翌日。1—Aのクラスメイトは昨日と変わらず全21名、本日も欠席無しである。教室には昨日の個性把握テストで最下位を記録した緑谷出久含めて全員が揃っている。先日担任の相澤が言い放った”成績最下位の者を除籍処分とする”という発言は、テストの結果発表のタイミングで生徒の最大限を引き出すための合理的な虚偽であったと説明された。故に最下位だった緑谷出久も俄然雄英の一員のままである。

名門雄英として飽くまでも高等学校、日がなヒーロー訓練をするわけにもいかず、午前中は通常の必修科目等の授業が執り行われる。

避けては通れぬ退屈なそれらを乗り越え、来たるヒーロー基礎学。

オールマイトの引率のもと、入試試験と同じ市街地を模した演習場へと案内される。

そして生徒は皆、自身の為に特別に誂えられたヒーロースーツを着用している。ヒーローとて、とどのつまりは人気商売。いかに自分を魅せるかである。ヒーロースーツの目的として個性を補助、強化する要素を備えてはいるものの、最大の目的は”最高に

かっこいい／かわいい自分”を演出すること。これに尽きる。

自信満々にコスチュームを着こなす生徒の面々。それぞれがいかにも“俺を見ろ！”といった体だが、それと同時に周りのコスチュームにも興味を隠せずにいた。特に女子生徒への視線は顕著だった。

特に発育豊かな八百万と拒の両名。八百万は体の大部分を露出したコスチューム。恐らくは肌の露出が個性の発動に関係するのだろうが、年頃の女子らしからぬ大胆な格好であった。

一方の拒は一見すると全裸のようだが、よく見ると肌の色と同じ真っ白なタイツで全身を包んでいる。首元から胸元にかけては肋骨のようなものが露出しており、内側に深紅の球体が鎮座していた。頭部以外は人間らしい特徴を持つ彼女の、一層特異な部分である。

が、それでも彼女の女性的な部分に目を引かれてしまうのはコスチュームの罪である。当の本人は周囲の視線に頓着は無いようだった。

「先生！ こゝは入試と同じ演習場ですが、また市街地演習を行うのでしょうか!」

全身を白い鋭角的なアーマーで包んだ人物が声を上げる。顔はフルフェイスのヘルメットで覆われてるが、そのハキハキとした喋りと声で飯田天哉であるとわかった。

「いいや！ もう二歩先に踏み込む！ 屋内での対人戦闘訓練さー！」

存在からして画風の違うオールマイトが、力強く答えた。

「ヴィラン退治は屋外で頻繁に見られるが、凶悪ヴィランは屋内の方が出現率が高いんだ。このヒーロー飽和社会、真に賢しい敵は屋内に潜む！」

君らにはこれから「ヴィラン組」と「ヒーロー組」にわかれて2対2の対人戦を行ってもらう！」

「!？」

一番最初のヒーロー基礎学の内容が、まさかの対人戦闘という事実を生徒たちの間に衝撃が走る。

「基礎訓練もなしに？」

「その基礎を知るための訓練さー」

生徒の一人、蛙吹梅雨が首を傾げながら尋ねたのに対し、オールマイトはそう即答した。椅子に座ってお上品にアレコレと御託を並べる前に、とりあえず実戦で体を動かして自分にできることや足りないものを直接叩き込むという算段らしい。

生徒たちはすぐに勝敗の設定をどうするのかや人員の分け方、攻撃の加減などの質問をオールマイトにぶつけた。オールマイトはすぐに質問には答えずに、すつとカンニングペーパーを取り出し、説明をつづけた。流石にそこまでは暗記していなかったようだ。

オールマイト。教師としてはまだまだ新米である。

さて、今回の状況設定はアジトに核を隠しているヴィランと、それを回収処理しようとするヒーローという構図となっている。ヒーローは制限時間内に敵を捕縛するか核兵器の回収をすること、ヴィランは制限時間いっぱいまでに核兵器を防衛するかヒーローを捕まえることが勝利条件。

「コンビ及び対戦相手はくじで決めるぞ！」

「しかし先生、我がクラスは21名の奇数です！」

「ああ、だからうち一回は2対3の戦闘になる。数の多いほうがもちろんできることは増えるが、当然連携の難易度も上がる！ 数の暴力を活かすのも楽じゃないぞ！ ちなみに戦闘の風景は地下のモニタールームでクラスのみんなと観戦するからな！ 講評もあるから心しておくように！」



「聞けば聞くほどトンデモ個性だよね……拒さんの」

「ぜっちゃんと呼んで」

「え、あの」

「呼んで」

「わ、わかりました……。改めてよろしく、ぜつちゃん」

平坦な、しかし拒否権を感じさせない圧のある声で『ぜつちゃん』呼びを強制された。拒さんはぜつちゃんと呼んでもらうことに何か譲れないポリシーのようなものがあるのだろうか。

異性をあだ名呼びするというのもやや気恥ずかしいが、彼女はこれからこの共に切磋琢磨するクラスメイトであり、これから始まる戦闘訓練のペアだ。今後の関係を良好に保つためなら自分の羞恥心などは捨て置こう。

しばらく俺をみつめたあと、何かに満足したらしいぜつちゃんはモニターへと視線を戻した。うん、少しずつだけど彼女の見た目にも慣れてきた。

さて、先ほどからしばらくペアになった拒さんと作戦会議を兼ねて互いの個性を教えあっていたが、その規格外っぷりには思わずため息が出る。今回俺こと尾白猿夫はヒーローサイドで拒さんとペアになった。個性把握テストの時から存在感を放っていた彼女の個性だが、直接彼女の口からその詳細を聞いてみると、まさに強個性としか言いよ



うのないものだった。

特にわかりやすいのが、高い防御性能の防壁を瞬時に数十枚単位で展開する個性。他にも腕を帯状にほどいて伸縮させられるらしいが、やはり特筆すべきは防壁の方だろう。

方向に制限もなく、ノーモーションで起動が可能。それだけでも俺からしたらばばうに強力に思えるが、なんと展開した防壁は防壁の正面に限定して移動させられるという。そのため攻撃手段としての使い道もあるという訳だ。その移動速度も個性把握テストを見るに生半可なスピードではない。

ただ、一方でいくつか制約もあるようで、特に今回影響があるのが彼女の機動能力だ。拒さんは体質上、全力で走ったりなどの機敏な動きが困難なのだという。心臓に疾患があるとかそういう類のものではなく、つまるところ異形型個性からくる一種のしわせというやつだ。彼女に限らず異形型の個性を持つ人には身体能力に難があるケースは珍しくない。俺も大きな尻尾があるのでそういった方面の問題には理解がある。

幸いにして一応個性把握テストで見せたように触手や防壁を活用して機動力はある

程度は補填できるようだし、それらを差し引いても彼女の個性の強力さを考慮すればデメリットを全て補ってなお余りある。今回の戦闘訓練が屋内というのも都合がいい、少なくとも彼女が俺の足を引っ張るような展開は考えにくいだろう。むしろ、その逆の可能性の方が高いかもしれない。

「一戦目の緑谷くんや爆豪くんの時にも思ってたけど、そういう派手さがちよつと羨ましいな」

ある程度立ち回り方や方針も固まった来たので、世間話をしてみる。

拒さんは不気味な容姿から話しかけにくい雰囲気はあれど、つつい会話をお互に交わしたくなる。言葉数こそ少ないが、それも彼女の気質のようなもので俺らに隔意があるわけではないので気にならない。

内容は先ほどの一回戦の内容だ。特に、彼らの個性について。

緑谷くんの自らの肉体すら耐えきれない、いつそ狂氣的とすら言えるパワーには見る者を圧倒する力がある。爆豪くんもそうだ。爆破というのは視覚的にも聴覚的にもよく映える。あれはそのまま爆豪くんのシンボルとなるだろう。戦闘の風景が派手な

ヒーローは、自然と人気が出る傾向がある。悲しきかな、見栄えというのはヒーロー稼業的にも決して軽視できる要素ではないんだ。コンプレックスとはまではないかれないけれど、俺としては目の上のたんこぶといったところか。永久の課題にならないといいんだけど。

「尾白くんのも、強力」

「そうかい？ とにかく地味だし、さつき話した通り特殊能力とかは秘めてないんだけど……」

俺は隣の仮面の少女の横顔に、そんなことを言った。

俺はあまりこの個性は“強い”と思っただけではない。無論、俺はこの尻尾を手足の延長として鍛えぬいてきた。信頼できる武器であると胸を張って言える。そして他の個性と比べてみたときに、俺の個性の方“強い”と断言することはできなかった。

彼女はしばらく思案をしているのだとおぼしき動作をしたあと、その暗黒空間にでも繋がっていきそうな黒い眼窩を俺に向けて喋り出した。

「私はあなたが個性把握テストで全ての科目において好成绩を収めていたのを覚えてい  
る。多方面の要素が混じるテストで欠点のない成績を残すのはとても困難。それを可  
能とした尾白くんを、私は状況によらず常に高い水準で力を発揮できる人物だと推察し  
ている。あなたの個性は、他の要因に左右されない絶対的な要素。私はそれを、とても  
強力だと考えている」

「……」

「あなたがいると、心強い」

今まで聞いた彼女の言葉の中で、一番長いセリフだった。

俺は二の句が継げなかった。驚きや戸惑いなどが色んな感情があっただけ、ただひと  
つ――

ぜっちゃんとならうまくやれる気がする。それだけは確信した。

## コーラちゃんかわいいヤツター！（1）

我が基地の指揮室には、こたつが配備されている。というか俺が私物を持ち込んだ。これを配備と言いつ張るのもちよつと違うかもしれない。

こたつはいい。寒いのは嫌いだ、こたつの快感を堪能するためのスパイスとしては寒さという概念を認めてやってもいいと俺は思っている。この指揮室には他にも冷蔵庫とか給湯器とかボードゲームとか過ごしやすい空間にするためにいろんなものを持ち込んである。

指揮室をこんな大胆なレイアウトにしていることが上の人にバレたらもちろん大目玉だ。首が飛ぶ。でも大丈夫。だって当基地は視察とは無縁のクソ辺境零細弱小アジトですからね。気楽でいいや。俺としては人手不足と懐事情だけがネック。

そういうわけなので、だから仕事できる最高の環境を作った。なんてったって監視の目がないのだから。やりたい放題やらない手はない。

ただ、たまに明らかに処分に困った人形を左遷的なサムシングでうちに動員されるケースがちよくちよくあるので、実際はこの基地の現状を上の人把握しているのかもわからない。手ごろな三角コーナーとでも思っているのだろうか。個人的には三角コーナーでも何でもいいのでこのままお目こぼししてくれることだけを祈る。

ま、こんな僻地にぶち込まれた奴からしたらたまったものではないだろうな。刺激も変化もない生殺しのような環境だし、まさに生き地獄になるのかもしれない。

「指揮官、手止まっていますよ」

「働きたくないでござる」

こたつのぬくもりにまどろむ俺をたしなめたのは、こたつの向かいに座るスプリングフィールドだった。栗色の長髪と柔和な笑みの似合う美人さんだ。そのまま呼ぶと文字で長いので、春田さんと呼ばせてもらっている。

春田さんはまさに優しいお姉さんの権化とでもいうべき存在で、常識的だし仕事もできるしなんと戦場に出ても強いと至れり尽くせりの無敵の存在である。そんな春田さんだが、一体全体どうしてうちののような弱小基地なんぞに在籍しているのか。これが本当に謎で、この基地の七不思議のひとつに数えられている。

「たっだいまあー！」

「お。おつかれー」

「あら、おかえりなさいませ」

勢いよく扉を開けてやってきたのはコルトS A A。出撃から帰投してきたようだ。いくら地方の僻地とはいっても、こんなご時世なので物騒なやつらが辺りをうろちよろしている。とはいれ、どれもごく小規模なものだ。十分に武装して対応すれば万が一もない。俺たちはこうして毎日『特に緊急性はないし危険視するほどのものでもないけど、ほっといて何かあったら困るから』程度の脅威を対象にせつせと排除して回るのが我々に任せられた任務なわけだな。そこ、しよぼいとか言わない。使ったあとの雑巾とか、水ですすぎ洗いたないとどんどん汚れが増えてつちやうだろ、そういうことだよ。え、雑巾なんざ汚れたら捨てるって？ごもつとも。

「コーラ各種冷えてるぞ、好きなのもっていくがいい。あ、報告書はそこ置いて」  
「はーい！」

彼女は当基地における貴重な戦力だ。常に人手不足に苛まれている我が支部としてはそんな扱いなど言語道断、アフターケアを欠いてはならないのだ。方法が俗っぽいのは目をつぶってください。

「出撃して帰ってきたら、冷えたコーラが私を迎えてくれる！ 本場に最高の職場だわ！」

聞くや否や、コルトSAAは部屋に備え付けられた冷蔵庫に飛びついて中のコーラを物色し始めた。ご覧の通りコルトSAAは重度のコーラマニアで、うちではコーラちゃんのだあだ名で通っている。ちなみにそれに関しては本人も満更でもなさそうにしている。

彼女はまさにコーラの為に生きていくといっても過言ではないほどのコーラ好きで、ひよつとしたら給料の代わりにコーラ渡しても許されるかもしれない。否定しきれないのが彼女の怖いところ。実をいうと彼女はまさに先ほど左遷的なサムシングでここのでやってきた人形の一人だったりする。まあ中八九コーラ関係でやらかしたんだろ  
うなあ。うん、想像に難くない。



しかし常にコーラを中心にものを考えている問題児待ったなしのコーラちゃんだが、適切にコーラを与えているうちはいたって大人しい。彼女の為に馬鹿にならない額がコーラ代に吸い込まれているが、背に腹は代えられぬのだ。うちに人を選べるほどの余裕はないからな、今いる人員でやりくりするしかないのだ。

「ここはほんつとうに最高の職場よ、愛してるわ指揮官！」

「はいはい、修復施設の使用許可出しといたからはよ行つてきな」

「はーいー！」

腕いっぱいコーラを抱えたコーラちゃんは、満面の笑みを浮かべて返事をして部屋を出て行つた。

ふむ。

「……行つた？」

「ええ」

「うう……コーラちゃん……好きだあ……」  
「あら指揮官、また感極まつて人間の言葉を忘れてますよ」  
「うう……」  
「あら指揮官、また感極まつて人間の言葉を忘れてますよ」

コーラちゃんの手前、全力で抑えていた反動が出てしまった。

何を隠そうこの俺は、コーラちゃん全推し勢だ。コーラちゃんを想うだけで心が洗われ、コーラちゃんが視界に入るだけで魂が浄化される。この世に存在してくれてありがとう。

「もう、仕事してください」

「コーラちゃんがいってくれて本当に良かった……。彼女が俺を生きる希望だ……」

「まだちよつと情緒が不安定ですよ」

いかんいかん、早く自我を取り戻さなくてはな。仕事はしっかりこなさなくてはいか

ん。一応うちは問題児をたくさん抱えているので、その辺りの報告をぬかって上に目を付けられたらたまってものではない。早速コーラちゃんの提出した作戦報告書を手に取って目を通す。特に内容に異常はない。いつも通りだ。今回も何事もなく終えられたようだ。

「しかし、当然のように撃破報告の中に装甲人形が混じってるんだよね……」

「いつものことでしょうか？」

「いやでも、まあ、うん」

おかしいな、彼女の銃種ってハンドガンなんだけだな。破甲用の装備とか搭載してないはずなんだけどな……。

コーラちゃんは一見すると単なるコーラキt……コーラ愛好家だが、銃の歴史の古さも相まってか同じくハンドガンを取り扱う人形にとっては尊敬される大先輩らしく、わざわざこの基地まで話を聞きに来るやつもいる。前にちらつとその時の会話が耳に入った。確か火力不足に関する相談だったと思うんだが、「死ぬまで撃ち続けるだけ」と男前オブ男前な返答をしていた。その後輩に人気出るわ。

ところで彼女の使うCoit SAAという銃はリボルバーでしてね。六発しか装

填できない上に、リロードの際には一発ずつ排莖して、また一発ずつ弾を込め直さないといけないんですよ。撃って撃って撃ちまくるには最悪の相性の銃ですが。しかしどういう訳か彼女は硬きこと山の如しでお馴染みの鉄血装甲兵を毎日ばったばったと薙ぎ倒しております。

仮にリロードの問題をどうにかして、装甲兵を通常弾でゴリ押ししていると考えても、彼女の提出した報告書を見ると更に謎が増える。まず弾薬の消費量がそれほど多くないし、作戦時間も完了までが早すぎる。俺は実際に出撃に同行している訳ではないので、戦闘するコーラちゃんをこの目で見たことはないのだが、一体どんな手品を使っているのだろうか。

これもまたこの基地における七不思議のひとつである。  
まあそんなに追求することも無い。別に虚偽の戦闘報告をしているわけでもあるまいし。コーラちゃんカッキーで済む話だからな。

コーラちゃんカッキー！

「さて、コーラさんも帰投したことですし、今日はもう来客はなさそうですね」  
「ん？ そうだな……おつとまちたまえ春田くん」

ふと嫌な予感がしたので、こたつから出てドアの方へ向かう春田さん呼び止める。

「どうされました？」

足を止め、不思議そうにこちらを振り返る春田さん。

「そうやって二人きりになるとすぐ部屋の内鍵を閉めようとするのはやめなさい」  
「チッ」

あぶないところだった。

## コーラちゃんかわいいヤッター！（2）

「こたつに入ってたべるみかんは本当に最高じゃのう」

「せやろ」

いつもの春田さんの定位置には、今日はナガさんが収まっている。ナガさんというのはナガンM1895のことだ。真つ白な服装に金髪赤目の小柄な少女なのだが、銃自体の古い歴史にちなんでかのじゃ口調で喋る。巷では彼女のそういう立ち振る舞いも相まっておばあちゃんによく呼ばれているそうだが、個人的にはこの小柄な風貌の子をおばあちゃんと呼ぶことに抵抗があるのでナガさんと呼ばせてもらっている。

さて、そんなナガさんがここにいる理由だが、今日は春田さん装備点検で不在なので副官の代役を務めてもらっているからだ。今もほっこりした顔でみかんを手にとってせっせと白い筋を剥いている。うむ、眺めているだけで不思議と癒される光景だ。ナガさんも寒さに強そうな恰好をしているが、それとこれとは別らしい。

ナガさんはうちの基地では元からここにいる珍しいパターンの人物だ。だいたいいんなやらかしてここに来るからな。寛容で親しみやすい彼女は当基地に欠かせない存在だ。なんだかんだですぐにこのだらだらした雰囲気に対応しているあたり結構した

たかでもある。

「まさに至福の時間というやつじやのう」

「全面的に同意する」

「しかしよくみかんなんぞ用意できたの。今のご時勢、フルーツは超がつくほどの高級品じゃろ」

完全に無垢となったみかんを一切れひよいと口に放り込んで言うナガさん。

ふむ、そこに気づくとは。確かに彼女の言う通りで、色んなアレコレで世界中がずたぼろになった昨今、野菜や果実のような植物由来の食品はとてもレアものなのだ。そう気軽に手に入る代物ではない。

「もちろん吹きとんだぞ。予算が」

「この馬鹿」

食い気味になじられた。なんてレスポンスの速さだ。

「はっはっは、基地の金で食うみかんは美味かろう」

「憎たらしいほどにの」

あきれ返ったジト目を俺に向けながら、トーンの下がった声で俺を咎める。しかしみかんを食べる手は止めないあたり、本当にしたたかだなナガさん。この基地で長いだけのことはある。その調子だ。

「まったく、おぬしの意味不明な金の使い方はどうにかならんのか」

「意味不明じゃないさ、だからだとすると一点にまつしぐらだろう」

「ま、嫌いじゃないがの」

この菌に物着せぬ物言いもまた好ましい。気を置かずに話せるという意味では貴重な存在だ。今まさにこたつ&みかんという物理的な恩恵を直に授かっている訳だしな、苦言を呈せるような立場でもないか。ナガさんはいつもなんだかんだ言いながら俺と一緒にいたらだとすることに定評がある。

「修復用のパーツ代や弾薬費は確保してある。心配はいらないさ」

「おぬしのことじゃ、そのあたりは心配しとらんよ。しかしそれならみかん代は一体どこから捻出したんじゃ？どこか別の所で採算を合わせなきゃならんじゃろ」

「こ、コーラ代……」

「この馬鹿」

食い気味になじられた。二回目だ。

いやはや、本当にナガさんは聡い人だ。事の重大さを一瞬で理解したらしい。年季の違いというやつだろうか。ちょうどいい機会だから相談に乗ってもらおう他あるまい。

「どうすればいいと思う？」

「知らん。簀巻きにされたまま馬に繋がれて引き回されたりするんじゃないかの」



「見捨てないで！　ていうかコーラちゃんってばそんなところまで西部的なの!」

「コーラさんに献上するコーラを用意しなかったらどうなるかわからないおぬしでもな  
かろうに」

「やっぱまずいかな……」

「死は免れんじやろうな」

「そこまで!」

どうやら事の重大を理解していないのは俺の方だったらしい。

「諦めて本当の事を話すしかあるまいて」

「骨くらいは拾ってくれよな」

「残っていたら話じゃな」

俺の中のコーラちゃん像が崩れる。言われてみれば俺の知っているコーラちゃんは十分にコーラを摂取した健康なコーラちゃんだけだった。コーラと一緒に冷静を欠いたコーラちゃん……想像するだけで恐ろしい。

「やっほー!　指揮官いるー?」

「ヒイツー!」

天使の呼び声が、今だけは死神の足音に聞こえる。

「や、やあコーラちゃん。今日もいい天気だね?」

努めて自然な様子で会話を切り出す。心の準備をしていなかったせいで声が上がってしまっただが、大丈夫、どこもおかしなところはない。ここが屋内なのは些細な問題だ。「え、今日?」 確かにいい天気ね、コーラの雨には負けるけど」

コーラの雨!? コーラちゃんにとってコーラの雨とは日常的に発生する気象なのか……? いや惑わされるな俺。迂闊にコーラちゃんの価値観について思いを馳せると戻ってこれなくなる。このまま本題に持ち込もう。

「実は折り入って大切な話があつてだな……」

「あら? 珍しいわね、指揮官がそんな風に改まるなんて。一体どんなコーラの話?」  
彼女にとって俺がコーラの話をするということは確定事項らしい。いや実際その通りだけど、なんか負けた気がするのはどうしてだ。

「とても言いづらい話なんだが、その、今週分のコーラなんだが……」

コーラちゃんの目がすつと細まった。コーラという単語が俺の口から飛び出た瞬間、彼女の視線から冷気が放射され始めたような気さえしてくる。だが、我が身可愛さに嘘を言っても仕方ない。どのみちすぐにバレるし、そうなったら正直に話すよりも恐ろしい未来が待っているからな。

「その、コ……」

コーラ代をみかんで使い切ってしまった、と言いかけてふとナガさんの言葉を思

いだした。

『簀巻きにされたまま馬に繋がれて引き回されたりするんじゃないかの』

それ死ぬんとちやう？ 俺は訝しんだ。

これ以上言葉を続けられれば。待つのは正直者の死。俺は確信した。

彼女に真実を伝えるのは折衷案を用意してからにすべきだ。うん、俺自身の安寧の為にもそうしよう。まずはとにかく、言いかけてしまった言葉を別の言葉に続けなくては。

「こ？ 今週分のコーラが、どうしたの？」

なにか、何か言わなくては……！

俺はこの窮地を脱する為に昨日の記憶を呼び覚ましていた。そう、あれは先日あった上司からの連絡通達の通信で……。

「今週はコーラ強化期間とする！」

「コーラ強化期間!?! なにそれなにそれ!?!」

ちくしやう、よりにもよって通信で上司から言い渡された『効果強化期間』のフレーズだけが脳裏をかすめてしまった。でもコーラちゃんの喜色満面の笑顔を見ると全てがどうでもよくなってくる。

「あ、ああ。だから、今週は好きなだけコーラを飲んでいいぞ」

「ほ、ほんと!?」で、でも指揮官、そんなお金どこに……」

「俺が出す。心配ないさH A H A H A!」

馬鹿野郎。俺の中のコーラちゃん甘やかし担当大臣が先走って発言しやがった。コーラちゃんが節制をせずにコーラを飲み始めようものなら、たちまち俺の貯金は跡形もなく姿を消すだろう。後先考えない発言ばかりしやがって、お前はいつもそうだ。

だが、お陰様で市中引き回しの刑だけは免れた。

「じゃあ、とりあえず今ある分全部飲んでくるねっ!」

「えちよ」

冷蔵庫から次々とコーラを取り出し、脱いだ帽子の中にひよいひよい投げ込んでいく。それは、まさに今の基地にある全コーラであった。

「指揮官と出会えたことが私にとって最高の幸福よ!」

捨て台詞でなんてこというんだコーラちゃん。刺激が強すぎる、ともすれば死者が出てもおかしくないぞ。現に俺の中のコーラちゃん甘やかし担当大臣は絶命した。いい気味だぜ。

「のう、指揮官」

「なんだよ」

「おぬしは本当に愚かな男じゃな」



## コーラちゃんかわいいヤッター! (3)

「指揮官、車買ってー」

「くまさん。うちにそんな金はないよ」

書類仕事かひと段落したころ、こたつでとろけたグリズリーがそんなことを言い出した。副官と思えぬとろけ具合である。副官といえばおなじみの春田さんは欠席。いまごろは近域で発見報告の上がつていた装甲持ちの人形を自慢の徹甲弾でぶち抜いている頃だろう。春田さんはうちの基地での貴重なライフル粹ゆえ、このような出撃は多い。致し方なし。

ということなので今日はグリズリーに副官の任を頼んであった。暇そうにぶらぶらしてるところをとつつかまえたのだ。俺一人で仕事を回すのはさすがにしんどい。

ていうか車で、君。車一台買うお金で一体何本のコーラが買えると思ってるんだ。うちはコーラちゃん一台の運用・維持で手いっぱいなんだぞ、一体どこにそんな余裕あるというんだ。

こちとら残りのコーラの本数が俺の残機とイコールで結ばれてるんだからな、そこらへん踏まえた上での発言を頼むよ。

「2000GTで我慢するからー」

「お前、とうとうメンタルモデルが……!」

「辛辣」

今のご時勢そんな素敵な車博物館とかにしかないだろうよ。それにたぶんもう博物館もろとも焼失しとるわ。

「だいたいなんで車」

「だってここ輸送用のやぼったいのしかないじゃん。もつと気持ちいいの乗りたい。指揮官マイカーとか買おうよ」

「俺のポケットマネーはコーラ代に消えた」

「うわあ」

聴いな。熊さんはもう俺が何をやらかしたのか察したようだ。

結論から言うとな俺の貯金は絶命した。

まさか普段コーラちゃんがあれで節制を心掛けていたなんて、この海のリハクの目をもつてしても見抜けなんだ。節約という呪縛から解き放たれたコーラちゃんの消費ペースは俺の予想を遥かに上回る勢이었다。でもさすがに命には代えられないから……。

「指揮官いるー? 報告書書けたわよー」

「お、マカロフ。流石に仕事が早いな」

執務室の扉を開けてのそつとマカロフがやってきた。青い服装とボリウムたつぷりの白い長髪がよく映える。魅惑の白髪だ。一度でいいから彼女の髪を全力でもふりたい。

「……な、何?」

もふりたいという欲求をダイレクトに込めて熱視線を送っていたら、マカロフに怪しまれてしまった。でもマカロフの髪に視線が吸い込まれるこの現象は極めて自然的な現象。俺は悪くない。この名状しがたき衝動を抑えることは俺が人間に生まれた以上不可能だ。ここはひとつ、マカロフに事前に断りを入れておくべきだろうな。

「マカロフよ。これは確信めいた予感なんだが、俺は近いうちに突然お前の髪の後ろからモフリだすことだろう。そのときは容赦なくぶっ飛ばしていいからな」

「鋭くいくわ」

「即答」

「流石にマカロフは順応がはやいねえ」

こたつの天板にべったりと頬をくっつけるように突っ伏したグリズリーが、MPとか吸い取られそうな声で声で感心している。お前もお前でよっぽど順応してると思う。

しかしまずいな、個人的には軽いジョークのつもりでぶっ飛ばしてもいいって言った



んだけど、マカロフが想像以上にガチの雰囲気だ。骨の一本くらいで済むだろうか。

「なんでもいいけど、ほら。報告書」

「お。お疲れさん」

いずれ痛めつけられるであろう未来の俺をいたわりつつ、差し出された活字の波にさつと目を通す。必要な情報を必要な分だけ端的に並べ立てるマカロフの文章は、報告書として完成度が高い。うーん有能。

報告書に限らず、マカロフはこの基地のだらけがちな雰囲気にならぬように淡々と仕事をこなしてくれる。こういった書類仕事では最強だ。横で液化化している熊とは大違いだぜ。

ちなみにこれがスパスとかになってくるともうだらしねえ姉モード全開で面白い物にならなくなってしまう。なんなら次の日も寝坊してきて報告書の提出も遅れる。そんなんだから毎晩体重計に乗っては顔を青ざめるような事態になるんだ。

「うひい、また装甲兵が出たのか。参ったなあ」

「そんなに気に病むことかしら。この程度なら対応できる範疇じゃない」

「戦力的には問題ないんだけどさ。弾薬費がピンチ」

「それは、確かに」

うちの基地の戦力はハンドガンが大半を占める。春田さん以外にもライフルを扱え

る者もいるにはいるが、報告書の数字を見るに対応しきれない可能性もある。その場合は致し方ないのでハンドガンのみんなまで死ぬまで撃てばいい作戦をするのだが、些か弾薬の消耗が激しすぎる。すごくやりたくない。

「でも元をただせばみかんに使い込んだあなたの責任でしょ？」

「むむむ」

「正論ティー」

「グリズリー、次クソギヤグ言ったらこたつ使用禁止な」

「はい」

なんて淀みのない綺麗な返事なんだ。そんなにかたつが大事かグリズリーよ。お前そこで越冬する気だろ。

「で、どうするの？ 食費でも切り詰める？」

「それはやりたくない。すごくやりたくないぞ」

食に不自由する環境は、余裕からもつとも対極にあるといっても過言ではない。もはや悪だ。空腹は人からゆとりを奪い、気が立つ。そうすると、やがて争いが起きる。つまり空腹から救ってくれるアンパンマンは真実の正義。歴史書にもそう書いてある。なんの話してたんだけ。

そう、食に不自由する環境が許せないって話だ。

「グリズリー！ なにか提案は!？」

「コーラちゃんに声かければいいじゃん。視界に映るもの全て鉄くずに変えてくれるよ」

「ちよつとまつてグリズリーのコーラちゃん像どうなってるの?」

「全てを焼き尽くす暴力」

「なにそれこわい」

確かにコーラちゃんが出撃した部隊の作戦報告書にはしばしば目を疑うような記述が散見されるけど、現場では一体何が起こっているというんだ。コーラちゃんが出撃したメンバーは一体何を見たというのか。

だが事実としてコーラちゃんにはどういうからくりか通常の弾薬消費量で装甲兵を抹殺した謎の実績がある。確かにこの状況を打破してくれる可能性は高い。一考の価値はあるだろう。

「コーラの備蓄はどうだったかな」

執務室に備え付けてあるコーラ専用の冷蔵庫を開き、備蓄を確認する。21ペットボトルのコーラが4本に、瓶コーラが1ダース。そして所狭しと敷き詰められた無数の缶コーラ。20本は超えるだろう。何も知らない人が見れば業者かなにかと勘違いすること間違いなしの冷蔵庫だ。

だが、ダメだ。

「どう考えてもコーラが足りない……！」

コーラちゃんの運用には大量のコーラを消耗する。出撃前の見送りコーラに作戦中に使用する継ぎコーラ、帰投後のお迎えコーラ。しかもその作戦におけるコーラちゃんのリザルトがめざましいものだった場合は、ここから更にボーナスコーラをプラスしなければならぬ。

先日の軽率で無計画なコーラ強化期間の実施により、コーラちゃんのボルテージは最大限まで昂っている。コーラちゃん運用の暁には確実にハツピーなニユースを届けてくれるだろうが、その場合はやはりごほうびとしてリラックスコーラ及びエクспанデットコーラの贈与があつてしかるべきだろう。これは欠かせない。

「もうこの基地にはコーラちゃんを維持する為の最低限の在庫しか残されていない」「いやそれ指揮官が甘やかしすぎなだけ……まあいいか。言つても聞かないでしょうし」

マカロフが何か言っているような気がするが、そんなことはどうだつていい。

モーニングコーラやアフタヌーンコーラといったデイリーコーラの消耗はどうすることもできない。呼吸をすれば酸素を消費するのとおんなじだ。

「この有様では俺の生命の火を灯すローソクたるコーラが、コーラちゃん一回の運用

で風前の灯火になることは火を煮るよりも明らかだ」

「なんか火にまつわる慣用句ばっかだね。そういうギャグ？」

「グリズリーはもう少し真面目な方向性で会話に参加してくれ」

「はあねむ」

「聞けよ」

こいつ。ほんまこいつ。俺の持ち込んだこたつで弱体化した人形ランキング三年連続一位なだけのことはあるわ。ちなみにここ一年で five—seven とドラグノフが凄まじい追い上げを見せているからな、いつまでも王者の座にいられると思ったら大間違いだぞ。

「コーラちゃんを呼ばないんなら、いよいよ他の手段を考えないとまずいわね」

マカロフがいないとマジで話が進む気がしない。今度からは熊じやなくてマカロフを副官に指名するようにしよう。あ、でもそうするとおふりたい欲求を御しきれずにつづ飛ばされてしまうな。これは悩ましい。

それはさておき他の手段か。正直俺一人では現状を打破できるような作戦を思いつける気がしない。いつペン皆に意見を募ってみるかな。幸い早急に対応しなくてはいけない案件ではない。まあ先延ばしにできる問題でもないけど。

「一度みんなを集めて対策会議を開こうと思う」

「あら、いいんじゃない」

「前はそのままゲーム大会になったよね。たのしみー」

……大丈夫かな。

## コーラちゃんかわいいヤツター！（4）

翌日の朝。

「全然人おらんがな」

今日はこたつのあるいつもの執務室ではない。長机とパイプ椅子、それから黒板だけのささやかな作戦会議室だ。

しかし、昨日の晩にこの小さい基地中からかき集めたパイプ椅子は、半分以上が空席だった。

「やっぱり朝から会議は無茶でしたね。みんな寝坊ですよ」

「流石にこんな少ないとは思ってなかったなあ」

結構大変だったんだけどなあ、椅子集めるの。こんなことなら手ごろなダンボール詰んで椅子にするくらいで丁度良かったなあ。

午後からの会議にすればよかったかなとも思ったが、それはそれでみんな居眠りするのがオチのような気がする。そして、たぶん居眠りする連中とこの会議に寝坊したやつらはほとんど同じメンツになる気がする。

「とりあえず今いるやつだけでやるか」

「では、出席を取りましようか」

そう言ったのは春田さん。今回は書記をお願いしている。

大した人数ではないが、こうも欠席者が多いと出席確認が大切だ。欠席者になんらかの罰を与える意味でもな。

今回の罰はそうだなあ、夕飯のカレーの時にフオークしか使えない罰にしよう。お米もルースも満足に掬えない歯がゆさに苦しむがいい。

「まずはSPAS」

「もぐもぐ」

「食べるか喋るかどっちかにしてくれ」

「もぐもぐー！」

「食べるの優先しよった！」

出席とつてる最中だよ今！ 食うなよ！ そして食べ物を持ち込むなよ！

「ちよつとどう思います春田さん！」

「まあまあ、SPASさんですから」

春田さんはもうSPASのこの態度に理解を示しているようだが、絶対おかしいからね？

ハンバーガーを口いっぱいにはおぼってなに言ってるかわからんけど、その割に元



気のいい返事なのが無性に腹立つ。今日だって朝ごはん食べるために起きてたんだろ  
うな。だってSPASだもん。お前はそういうやつだ。

食事中のSPASなんて相手にしてられん、次だ次。

「あー……AA—12」

「うっす」

「その様子だとお前また徹夜か？」

「私は睡眠を超越した」

「お前それ絶対徹夜テンションだろ」

キャンディをくわえたまま、両手でサムズアップするAA—12。目の下の隈をみる  
に相当キてるようだが、こいつ大丈夫か。突然ぶっ倒れたりしないだろうな。

しかしこの徹夜テンションのが上手い事働いて斬新な意見が飛び出すかもしれない。  
こういう人員がいてもいいだろう。

でもそうだな、こいつが会議中に居眠りしたときは見てみぬふりをしてやろう、それ  
くらいの情けはあってもいい。

さて次。

「ネゲヴ」

「……ZZZZZ」

「……」

「春田さん、これどう思う？」

「寝てますね」

「寝てるよな」

「やつばこれ絶対寝てるわ。春田さんが言うんだから間違いない。背筋のピンとして伸ばして座ってるけど、とても穏やかな寝顔してるわ。「スヤア」って擬音をつけたい。」

「ネゲヴー？」

「ハッ！ ……寝てないわよ」

「……まあいいけど。出席してくれたただけでお前は偉い」

「でしょ！ やつばエリートだから私」

「ちよつとぼんこつ入ってるのが玉に瑕だけどな」

「さ、誰がぼんこつですって！」

「よせ。お前のぼんこつエピソードには本当にいとまがないんだ。こんな朝っぱらから俺にその数々を紐解かせる気か」

「すべて私が間違っております」

「よしそれでいい」

ネゲヴは自分のことを一流エリートだと思い込んで一般ぼんこつエリートだからな。有能なのに諸々がぼんこつなんだよなあ。その割に自分に対する謎の自信はいつたどこからやってくるのか。でも正直見てて面白いんだよなこいつ。結構すき。

「ナガさん」

「おるぞ。わしは早起きなんじゃ」

朝早いのはさすがおぼあちゃんといったところか。しかも常識的。だつて名前を呼んでそれで終わったもん。出席をとるときって普通はそうなるよね。

さて、これで全員らしい。ほんとに少ねえ。どうせドラグノフは来ないとは思ってたけど、昨日までせつせと準備してたグリズリーまでいないし。夜の椅子集めまで手伝ってくれたのに。

まあ仕方ない。

「さつそく本題なんだが、うちの基地のまわりに装甲つきの人形がうろちよろしててな。まあこれは直接偵察してもらつてるお前たちならわかつてるだろうが」

「わしあいつら嫌いなんじゃ。撃つても撃つてもまるで歯が立たなくてのう」

苦々しい顔でナガさんがぼやく。やはり現場で戦つてる人としても装甲兵の存在は目の上のたんこぶであるらしい。まあそらそうだわな。

「ナガさんの言う通りでな、弾薬の消費量も馬鹿にならんし対策を考えにやならん」

「なら私がいるじゃない。このネゲヴに任せれば一網打尽にしてみせるわよ」

「お前はダメだ」

「何で！」

ネゲヴが俺に食って掛かる。お前からしたら理不尽に感じるかもしれない。でもな  
ネゲヴ。これにはちゃんと理由があるんだ。

「お前すぐトリガーハッピーになるじゃん」

「いやいやいやいや！」

いやいやじゃなくて。お前否定できるような立場じゃないんだぞ。完膚なきまでに  
事実じゃん。なんなら否定材料がまったくないことくらいお前自身が一番わかっ  
てるだろ。

「違うの！ あれは単なる100点バーストだから！」

「わかってねえこいつ！」

俺の想定を超える常識をお持ちだった。え、何？ 100点バースト？

「マシンガンってそういうものだから！ ノーカウントよノーカウント！」

「おだまり！ お前の妄言に付き合ってたら二日と経たずに弾薬が底を尽きるでし  
ょうが！」

ネゲヴが謎理論を提唱するのも今回が初めてじゃないしな！ しよつちゅう弾を使

う言い訳しやがるんだこいつ。

「うちの運営方針は一にコーラに二に儉約だ、忘れたとは言わせんぞ！」

「ぐぬぬ……！」

「春田さんを見習え、ワンショットワンキルだぞ。こんなにお財布にやさしいことがあるか」

「あら、光栄です」

「それにひきかえネゲヴ。お前はどうかなんだ、言ってみなさい」

「い、いっぱいショットワンキル……」

「そういうとこだよー！」

だからぼんこつなんだお前は。マシンガンゆえの多量な弾薬消費は、まあしょうがない部分もある。でもそれに対する考え方というか、そのあたりの諸々がお前のぼんこつたる所以だよ。

「まあネゲヴ。お前だって腐ってもマシンガンの端くれだ、引き金から指を離したないのもわかる」

「く、腐ってないし」

「だからお前のために半年に一回だけ撃ちまくってもいいXデーを設けてるだろ？ それで我慢してくれ」

「まあ、わかってるけど……」

ほんとはこのXデーも相当しんどいんだ。正直年に一回に伸ばしたい。出費めっちゃきついんだ。コーラに回したいんだ。

でもネゲヴには普段から無茶とかさせてるし、我慢もさせてる。これはなんとか維持したい。たぶんネゲヴもそれをわかってくれてるからこそ引き下がってくれる。

確かにネゲヴはこの付近の装甲兵程度なら、本人の言葉通りもの見事に壊滅させてくれるだろう。弾薬消耗量どえらいことになるけど。

「てかコーラちゃん呼べば解決じゃね?」

AA-12が、さも不思議そうに問う。やはりその疑問はみんなが持ちうるものなんだな。

「それはダメなんだ。コーラが足りない」

「出た指揮官の謎の尺度」

謎ではない。きちんとしたコーラレートに則った単位でコーラを考えている。まあそれを人に言ったところで理解を得られないのも経験上わかっているんで、わざわざ弁明したりはしない。

「ともかくそういうことだから他の方法を頼むよ」

と、ここでさきほどまで食に没頭していたSPASがすつと手を上げた。

「お、なんだSPAS。言ってみろ」

「おわかりください」

「ねえよ！」

この期に及んで何を言い出すんだこいつは。一瞬でも建設的な意見が出るかもしれないと思った俺が間違っていた。だいたいおかわりもなにもお前に一食目のハンバーガーを提供したの俺じゃないし。

「お前が来た日を特異点としてエンゲル係数がバグってるんですけどその自覚はおあり？」

「？」

「何かわいらしく首傾げてるわけ？」

だめだ。自覚症状がまるでない。しばらく余裕のあった配給の貯蔵が、いつきに火の車になった全ての原因はお前にあるんだぞ。

ちなみに貯蔵量の動きだけ見ると配給もコーラもだいたい同じような推移をしている。つまり一個人が左右してるってということが読み取れるわけですね。

今どうでもいいわそんなこと。

Bannon!

「UMP40ちゃんの登場だぜオラアーツ！」

「ぶおおおおおえっげほっげほっ。……ぶおおおー!」

「朝っぱらぐらい大人しくできねえのかてめえらはよおーっ!」

けたたましくドアを打ち破って現れたのは、ギヤリギヤリと小さなタイヤをフル稼働させながら台車を押すUMP40と、簧巻きの状態で台車に乗せられながら謎のエンジン音を口ずさむアーキテクトだった。

ご覧の有り様のとおり、こいつらはこの基地における筆頭問題児。この二人に比べたらトリガーハッピーのネゲヴやエンゲル係数の破壊者SPASなんて可愛いもんよ。

だいたいこいつらはここに来たいきさつからしてもうよろしくない。

アーキテクトはなんと鉄血のハイエンドモデルの捕虜であるそうだ。まあ藤のような紫色の瞳とか陶器のような白すぎる肌など、IOPの人形らしからぬ特徴があるのでまあわかりやすいっちゃあわかりやすい。

そもそもなんで鉄血のがうちの基地ではっちゃけてるのかと言えば、どつかで捕虜にしたはいけど諸々がめんどくさいことが判明したので、暇なうちの基地に押し付けられてしまったという悲しい理由がある。この基地の方面には大規模な鉄血の勢力もないのも要因かな。

それにしてもこのアーキテクト、ハイエンドモデルという肩書に対して申し訳ないくらいにアホである。たぶん上の人にもほとんど危険視されていないんじゃないかな。



そしてUMP40だが。こいつはなんか色々ダメだ。うちの基地に新しく人がくるときは何かしらの形で事前に連絡が来るものなんだが、このUMP40だけなんの連絡もなく家具を運搬する物資箱に詰められてやってきた。ご丁寧に『存在してはいけないことなってるからよろしく♪』というポストカードつき。送り主からして不明という数え役満。

無尽蔵のテンションが生み出す暴走列車とはお前のことだ。

「で、何しに来たんだよ」

「じゃーんー！」

「……なんだそれ」

「装甲兵に困ってるって聞いて、作ってみた！」

UMP40が取り出したのは、密閉されたコーラのペットボトル。

「これね、コーラ爆弾」

「コーラ爆弾!?! な、なんておぞましいものを……!」

コーラ爆弾。それは、コーラのペットボトルのキャップの裏に糸を通したメントスを仕込むことで、コーラを投擲した際の衝撃で内容を攪拌させメントスコーラ反応を引き起こす、れっきとしたケミカルウエポンである。しかしそのあまりに非人道的な要素を伴うため、その実用は見送られてきた。

その現物が、ここに……。

『UMP40、道徳を失う。』今回の議事録の副題はこれで決まりだな。

とか言ってる場合じゃねえ、こんなところコーラちゃんに見られるわけにはいかん、すぐに処分しなければ――

「ねえ指揮官。コーラが無いんだけど……」

「ヒイツ」

おかしいなあ、天使が死の宣告してくる。

恐る恐る作戦会議室の入り口を見てみると、ただコーラが見つからない状況に対して、悲しそうに眉を下げるコーラちゃんだけがいた。なんていたたまれない……。だが、いまコーラをコーラちゃんに提供することはできない。UMP40のほうをちらりと伺うと、コーラ爆弾は後ろ手に隠していた。UMP40もこの状況の危うさが分かっているらしい。

よし、このままうまい事隠し通して――

「コーラならあるよ！ ほら！」

このアホ！ バカ！ だからお前はアーキテクトなんだ！ なんて自ら寿命を縮めるような発言をするんだ！ 台車の上で嬉しそうにうねうね跳ねやがって！ だいたい何で簀巻きになってるんだよ。いつもほとんど放し飼いで好き勝手歩きまわってる

のに。ノリか？ やっぱノリなのか？

しかしまずいぞ、アーキテクトのキラークラスのせいでコーラ爆弾を隠し通せなくなつてしまった。だが、うまい事言いくるめることができればあるいは……！

「あ、えつと、コーラ爆弾つていいまして。これ、あの。えへ」

「へたくそか！」

ちつとも言い訳できてないじゃねえか！ 何ならもうどうしようもなくなつちやつて愛想笑い浮かべるしかなくなつちやつてるじゃん！

しかしあの傍若無人、テンションの永久機関たるUMP40がたじろいでいる。コーラを前にしたコーラちゃんおそるべし。見たまえよあのぎこちない笑顔と冷や汗。ちよつとかわいそう。というかそんなビビるくらいなら最初からコーラに手なんか出すなよつていう。

「いいねそれ！ 私好きだよ！」

「え、ほんと!？」

おや。これは風向きが変わつてきたぞ……？ これなら、あるいは五体満足でこの作戦会議室から出ることが——

「これ振ればいいの？」

「あ、ちよつとここで振ったら——！」

20XX年 X月 XX日。

作戦会議室は、コーラの泡に包まれた――

このあとめちやくちや掃除した。

## コーラちゃんかわいいヤツター！（5）

「悪いな春田さん、手伝ってもらっちゃって」

「いいんですよ、これくらい」

基地の倉庫で、春田さんには資材の整理を手伝ってもらっていた。

普通、こんなものは指揮官や戦闘を行う人形が当たる作業ではない。でも普通の話をしたって仕方がないんだ。だってうちの基地にそんな人的資源の余裕はないからね。

ちなみに春田さんをお手伝いにチョイスした理由だけでも、ある程度身長のある人形なら誰でも良かったんだよな。

ただ、近いうちにそう言う人にこえをかけようとしているという相談を春田さんにしたら「私がいるじゃないですか」と即答されたのでそのままお世話になっている。

「気を付けて下ろすんだぞー」

棚の上のダンボールに手を掛けている春田さんに注意する。あのダンボールは確か飲料水が入ってるから、見た目より重いはず。

「あら、へっちゃらですよこれくらい。こう見えて私、力持ちなんですから………いたっ」  
「ああ、言わんこっちゃない………」

頭上に抱えるようにダンボールを持ち上げていた春田さんだが、重さを甘く見ていたのか手を滑らせ、ゴスつという痛々しい音と共に頭をぶつけていた。

「けがとかしてない？」

「あいたたた……お恥ずかしい。はい、なんともないですよ」

そりやよかった。角からいったように見えたから見た目以上にグレートな一撃かと思っただが。時々忘れるけど彼女たちは俺らと違う人形なんだもんな、そら防御力も違うか。

「そういえば私、指揮官と一緒に作りたいものがあるんですよ」

「ん、今か？」

「ええ、丁度二人きりなので都合がいいんですよ。お願いできますか？」

「まあ、物によるとしか言えないかな。何を作るんだ？」

春田さんには普段からにお世話になってるからな、まあよっぽどの者でもない限りはかなえてあげたいと思う。ましてや春田さんの方から何かをねだることなんてめったにあることじゃないからな。

「子供をつくりましょう」

「うわあああああ！」

俺は逃げ出した。

◆  
あの日以来、春田さんの様子がおかしい。

「指揮官？ どうしました？」

「いいいや。なんでもない」

あのあとも、春田さんには変わらず副官をお願いしている。特に不審な言動や動きはない。ひよつとすると、あのとときの倉庫での出来事は悪い夢か何かだったんじゃないだろうか。だって春田さんはこんなに真面目なんだから。

「そうですか。指揮官は子供が何人ほしいですか？」

「おっと？」

ゆめのつづぎがはじまってしまったようだ。

「あー……春田さん。子供は作らないよ？」

「なんでですか？」

なんでですかってなんですか？（困惑）。そっくりそのままお返しさせてくれ。

「だってほら、障害だって色々あるしそもそも俺たちってそんな関係じゃないし、ね？」  
「私の何がいけないんですか？ 教えてください。全て直します。最悪取り替えます。だから、だからそんなこと言わないでくださいっ」

悪いのは多分頭なんだよなあ……。というか最悪取り替えるって何よ。いや、できるのか……。？ だとしてもそんな軽率にポンポンと変えていいようなもんじゃないのは素人の俺にもわかるぞ。

なんとかして、なんとかして切り抜けなくては……

「とりあえず春田さん落ち着いてください」

「いいえ落ち着いています。ただ今から冷静さを欠こうとしているだけで」

「なおさら悪いわー！」

春田さんがこんな調子になってしまったのは十中八九あの日倉庫で頭をぶつけてしまったのが原因だろう。ここはひとつそれを春田さんにわかってもらって修理に赴いてもらうしかない。

「春田さん、あなたはいま様子がおかしいんだ。まずはそれをわかってほしい」

「はい。愛ゆえに……。ですわね？」

違います。でもいちいち突っ込んでたら話が進まない。ここはぐつとこらえて先に進まなくては。



「だから、一度IOPまで出向いて検査を受けてほしいんだ」

春田さんは微笑んだ。

「……そうやって私を遠ざけようとしているんですね？」

「えっ」

「私がどんな思いでこの基地に来たと思っっているんですか。戦果主義の中央の老害どもの命令を一介の人形風情に過ぎない私が蹴るのがどれほど大変だったと思っっているんですか。逃がしませんよ絶対に。私はずっと指揮官と一緒にいるんです。指揮官もそのほうが嬉しいでしょう。なのにどうしてそんなことを言うんですか。そんなに私の事が嫌いなんですか？」

「ま、待つんだ春田さん。俺が春田さんの事を嫌いだななんてとんでもない。こんな辺鄙な基地に春田さんが来てくれたおかげでいつも助かっているし、今日だって副官としての働きにどれだけたすけられたことか。普段の雑談から重要な会議まで真摯に相談に乗ってくれる春田さんのことがまさか嫌いだななんてことあるはずが」

「じゃあ好きなんですかね？」

「そ、そうなりますね」

「あ、ああっ指揮官っ！」

「ひえ」

しまった。春田さんが両手を広げて近寄ってくるものだからつい避けてしまった。

「……どうして避けるんですか？」

「ほ、捕食されるような気がして」

「まだそんなことしません！」

「まだっていった！今まだっていった！」

「この春田さん危険すぎる！この前までの温和な春田さんを返して！」

「いいじゃないですか両思いなんですから！逃げる必要なんてありません、今すぐ早く一緒にやりましょう！」

「ま、待つんだ春田さん！」

「覚悟の準備をしておいてください！近いうちに籍を入れます。姓名も変えます。結婚式にも問答無用で来てもらいます。招待状の準備もしておいてください！あなたは私の伴侶です！人生の墓場にぶち込まれる楽しみにしておいてください！いいですね！」

い、行ってしまった……。

それにしても何だったんだあの迫真ともいえる凄みは。まさか春田さんにあんな一面があったなんて……。

というか、春田さんはあれほどの啖呵を切って一体どこに行ったんだらうか。  
……。

な、何かわからんがすごくマズい気がする！ 後を追わなくては！

## 六畳一間のアズールレーン

戦争は終わった。

超国家軍事連合『アズールレーン』。未曾有の新技术、新たなる兵器『KAN—SEN』の駆けた誉れある海戦。

すべて過去の話だ。国家の枠を超えた共同戦線は解体された。

純白の群服に身を包んで革仕立ての椅子に深く座り込み、豪華な執務机を挟んでガラスの向こうに広がる母港を望んでいたのも今は昔。

今や俺は六畳一間のボロアパートの一室に小さなちゃぶ台ひとつと敷布団を広げ、裸のまま吊るされた電球を蛍光灯に取り換えて白すぎる光に目を傷めていた。

様々な国に属するKAN—SENを率いていた指揮官という個人は、終戦に伴いお役御免と相成った。

その後については様々な道を示されたものの、結局俺は軍役に身を委ね続けることはしなかった。今ではただのフリーターだ。

だいたい年齢の割に押し掛かってくる責任が重すぎたんだ。規律も厳しいし、だいたい俺は人の上に立つタマじゃない。

口を一文字に結んで、背筋伸ばして、腹から声出して。面倒くさいんだよ全部。はっきり言って性に合わん。

あんな自分を偽るような真似をこれ以上続けていたら、いよいよ精神を病んじまう。そういう訳で、義務を果たしたらすぐに任を降りた。

別れの言葉とか挨拶回りとかもほとんどしていいない。一握りの世話になった恩人なんかにごく短い手紙だけ書き残した程度か。

一人一人が今後生活していける程度の金銭は手切れに貰いネカフエを転々とした末、このトタン建築の立ち並ぶ住宅街の片隅に佇んでいたボロアパートにたどり着いた。

今は重桜の『都会人の想像する田舎』くらいの場所に住んでいる。周辺に土地特有のローカルなコンビニやスーパーがあり、少々自転車を漕げばまだシャツター街に進化してない商店街にたどりつく。

今までが堅苦しすぎる環境だったがゆえに、かなり居心地がいい場所だ。

とはいえ、俺の懐も老人のような生活をするだけの金しかない。趣味を見つけて人生を謳歌するには心もとないのだ。

なにか勤め先を見つけないといけないのだが、俺も公園で遊んでいるキッズの24%くらいには「おじさん」と呼ばれるくらいの年齢。

面接や履歴書にその年齢になるまで何をしていたか記述しなくてはならないのだが、

俺の経歴など上から下まで機密まみれ。

あるいは馬鹿正直に書いても鼻で笑われて終わるようなことしか書けない身の上。特技はパルプンテです。

仕方がないので無職で通しているのだが、そうするとたちまち社会的な信用が疑われてきて弾かれ出す。おかげ様でまったく上手くない。世知辛いね。

とにかくバイト先でも探してみるかと試しているが、あまり状況は芳しくない。

たとえばつい先日までは倉庫整理のバイトをしていたのだが、長年の座り仕事が祟ってか荷物を持ち上げる時腰から滅びの音のイントロを察知したのであえなく断念した。

今は次のバイト先を探している最中だ。

「腰は命よりも重いと言うからな。運搬系はパスか……」

まるで上手くないって思えないように思えるが、それでも俺は十分楽しんでる。

毎日漢字塗れの書類の前に座って、まるで意味の分からん艦船の特徴や配置を覚えて、訳も分からず大勢の命を背負わされて。

ただっ広い執務室で窮屈な制服に身を包んで、軍帽を深く被って動揺を押し隠し、震える指先を手袋で覆い隠して。低く唸るようにして、震える声を誤魔化しながら進軍の命令を出して。

周りのやつらはみんな俺を持って囃した。英雄。救世主、運命の人。大げさな言葉ばか

りだ。

富も名声も、望まずとも溢れるように手に入っただろう

馬鹿々々しい。そんなもの、ただの一度も望んだことなんてなかった。

最後まで、何一つ面白いことなんて無かった。

——それが今やどうだ。

小さな部屋で大きくあぐらをかいて、朝からバイトで汗まみれになりながらバイトして、誰にも邪魔されないで酒を呷って泥のように眠って。

俺は初めからこれで良かった。これが良かったんだ。俺のようやく勝ち取った、本当に欲しかったものがこの暮らし。

もちろん上手いかないことだらけで、辛いときもある。それでも男身一つの暮らしのなんと居心地の良いことか。

そんな風に、次の勤め先を求めてちやぶ台に広げた求人チラシを吟味していたときのことだ。

コンコンと、ドアのノックする音が部屋に響いた。無論インターホンなんて便利な利器は備え付けていないので、うちはこれがデフォルトだ。

今は逢魔が時。日没の間際だ。こんな時間に、それも俺の部屋に訪問者とは珍しい。

宗教勧誘とかか？ それとも放送局の集金かな。うちはマジでテレビないからな。

アンテナすら無い。集金業者恐れるに足らず。

そんな思考で玄関へ向かい、ドアスコープを覗こうとした刹那。

「私だ」

——聞き覚えのある女性の声。

俺は音を立てないようにそつとドアチェーンを掛けて、抜き足差し足で扉から離れた。

息を殺し、気配を隠す。

「反応がないな。留守だろうか」

はきはきとした張りのある声。ああ、俺はこの声を知っていると。

KAN—SEN名『エンタープライズ』。アズールレーン指折りの実力者。

彼女を形容するには、たった一言で良い。

——強い。それに尽きる。

あるいは、もう一言足すならば。

——重い。それに尽きる。



## ブルーアーカイブと大忍び

かつて葦名に名を馳せた古い忍び、梟。

彼は自らの老いたるを自覚したとき、忍びの在り方に背く願いを抱いた。

それは『己の名を日ノ本中に轟かせる』というもの。

その野望の根本には、死への恐怖があった。

自分を殺し影に生きるのが忍びであり、死地に身を置くことなど、ありふれた日常でしかない。

だが大忍びとさえ呼ばれた老獪な忍びなれども、あるとき酷く死を恐れるようになってた。

梟は気づいたのだ。隠密として生きて己が死んだとき、自分がこの世に生きて証をただの一つも遺せないことに。

だから葦名を、生まれ故郷を謀った。

虎視眈々と睨みを利かせる内府方と内通し、戦で疲弊した武家の内情を密告した。

その目的は葦名に秘められた不死の血。竜胤と呼ばれるそれを手中に収めんと二年を跨ぎ張り巡らせた謀略は、やがて大詰めと至る。

舞台は黄昏時の葦名城、天守閣。

己が霸道に最後に立ちあはだかつたのは、かつて己が戦場で気まぐれに拾い、息子として迎え入れた野良犬。

ほんの戯れにと己が技の粋を叩き込み、熟達の忍びへと育て上げた、梟ただ一人の愛弟子であつた。

野良犬は時を経て狼となつた。既に倅は梟に従順な飼い犬ではなくなつていたので。狼は義父に嵌められた”掟”という首輪を引き千切り、主のため命を賭して義父と刃を交えた。

そして、梟は狼に敗れた。

生きた証を何ひとつ残せぬことをずっと畏れていた梟は、最期に父越えを果たした狼に葬られ、安らかに死を受け入れた。

だが。



「因果とは、まこと異なるものよ……」

梟は未だ生き長らえていた。それも異なる時代、異なる世界で。

大規模な学び舎が幾千と寄り集まり、連邦を形成した巨大学園都市、キヴオトス。

訪れた当初は困惑を極めたが、そこは忍び。忍び潜む事こそ忍の本懐。群衆に紛れ土地に馴染む能力もまた備わっていて当然である。

迅速に地を掛けては聞き耳を立てて情報を収集し、あるいは忍び込んだ先で図書を読み耽り知識を集めた。

建築物からして見慣れぬものだったため、異国に流れ着いた可能性もあったが、幸いにして言語は梟の知るものと類似していたことも僥倖であった。

中でも目をむいたのは、銃火器の存在。連装式の石火矢は一心が所有していたが、この世界のそれは遥かに進歩した代物であった。

殺しを生業とするものなれば、やはりどうしても興味を惹かれるものだ。それも一般的に流通しているとなればなおさら。

他にも梟の知識では及びもつかないような文明の利器の数々。己の常識が根本から覆される感覚を梟は感じた。

少くない動揺はあったものの、梟はそれに柔軟に対応することができた。何故なら、梟は初めから生き方を変えることを決めていたからだ。

もつと言えば、梟はとうに忍びとして生を捨てることを決めていた。

大忍び、梟はあの日、斜陽の天守閣にて死んだ。

他ならぬ自らの倅に父越えを果たされ、葬られたのだ。

だから忍びとして梟はもういない。

もとより、梟は自分を夢破れて最期を迎えた矮小な老人に過ぎないと捉えている。

紆余曲折あったとはいえ、満足して亡くなった身の上。置かれた状況にしたって、あるはずのない余生を過ごしているようなものなのだ。

未練などあるはずもなかった。

「いかがなさいました？」

「お気に召されるな。老人の独り言です故に」

梟に問いを投げたのは、長い黒髪に青い瞳の若い女性。名を七神リン。連邦生徒会所属の幹部であった。

「では改めて。あなたが、連邦生徒会長がお選びになった先生……でよろしいんですね」

「恐らくは、じゃがの」

「こんな状況では、お互い推測形でお話するしかありませんか」

「構わぬ。して、仔細はどうなっておる」

忍び以外の生き方など知らぬ梟であったが、人間万事塞翁が馬とも言う。長く生きれば何があるかなど想像もつかないものだ。

今や梟は装いも慣れ親しんだ鳥蓑を脱ぎ去り、格調高いとされるスーツなる衣服を着用している。

「話が早くて助かります。あの生徒会長がお選びになった方だというのも納得ですね」梟の置かれた状況からしてみれば余裕とは程遠いが、年相応の落ち着いた振る舞いを見せた梟にリンは安堵の表情を浮かべる。

早速本題に入ろうとしたリンだが、間の悪いことに話し出そうとした彼女をエレベーターがチン、とフロアに到着した音が遮った。

「連邦生徒会長に会いにきました。風紀委員長が現状に対する回答を要求しています」  
「主席行政官。お待ちしておりました」

「代行！ 連邦生徒会長を呼んできて！」

エレベーターからなだれ込むように飛び出してきたのは、三人の少女。

一人は亜麻色の髪をした眼鏡の少女。左腕に『風紀』と書かれた腕章を巻いている。

一人は黒い制服に長銃を携えた赤目の女性。腰より長く黒髪を伸ばしており、とてつもなく胸が大きい。

一人は紺色のツーサイドアップが印象的な、白衣の少女。

他にももの言いたげな制服姿の少女が数名続いていた。

話にも水を差されたリンは、いかにも面倒なことになったと言いたげに深く溜息をつい

てから口を開く。

「皆様のご用は今、学園都市に起きている混乱の責任を問うためでしょうか？」

「そうよ！ 数千もの学園自治区が混乱状態なの！」

「停学中の生徒が矯正局から脱出したとの情報もあります」

「出所不明な武器・兵器の不法流通の増加率が2000%を突破しました。学園生活に支障を来すのも時間の問題です」

梟はそれらの具申を、リンの隣で腕を組みながら寡黙にして聞き届けていた。

傍らに静かに佇む2 m超の巨大な老人の存在感は凄まじく、少女たちは苦情をまくしたてながらもちらちらと老人の様子をうかがっていた。

「まずは結論を。連邦生徒会長は行方不明になりました」

「え!？」

リンがさらりと明かした事実には生徒たちが驚きの声を上げた。

「現在の連邦生徒会は行政制御権を失っております。ですが、ただいまその問題は解消いたしました」

「……それが儂を呼びつけた理由かの」

蓄えた髭を撫でながら、梟が厳かに言う。

「はい。この先生こそが、フィクサーとなってくれるはずですよ」

「この人が!」

「待って。この先生はどなた?」

生徒たちに動揺が走る中、紺色のツーサイドアップの少女——ユウカが冷静に問うた。

「これからキヴオトスの先生として働く方であり、連邦生徒会長が指名した人物です。

お名前は——」

「儂の名は……よい。ただ、先生とだけ。それでよかろう」

「だ、そうです」

腕を組んで仁王立ちをした梟が重苦しい声で言い、リンもそれに習うものだから、他の生徒は口を挟めなかった。

「さて、先生はとある部活の担当顧問としてキヴオトスにいらつしやいました。名を連邦捜査部『シャーレ』。

詳細は省きますが、一種の超法規的機関です。ここから30kmほど離れた部室に先生をお連れしなくてはなりません。モモカ!」

リンが虚空に呼びかけると、人影がホログラムによって映し出される。白衣に身を包んだ桃色のツインテールの少女だった。

『直行ヘリの手配しろって? 無理無理、今シャーレの部室がある外郭地区は戦場だよ』

「……どういふことですか？」

「停学中の生徒が辺りを焼け野原にしているみたい。どこからともなく手に入れた巡行戦車まで乗り回してさ」

リンが鋭い声で聴き返すが、モモカと呼ばれた少女はあくまでもマイペースに気ままにお菓子をつまみながら、他人事のような詳細を報告する。

一方の梟も、小難しい顔をしてモモカを、いやホログラムそのものを睨んでいた。（自らの姿を遠方に投射しておる。幻のようで現でもあるか。科学。幻術とは似て非なるものよな）

未知そのものである科学の産物を目の当たりにした梟は、瞳の奥で静かなる感嘆を持ってホログラムを観察していた。

梟が常識を覆す代物を目の前にしてなお驚く姿を見せないのは、容易く隙を見せまいとする、忍びとして染みついた癖のようなものであった。

「シャーレの建物を占拠するのが狙いかな。何か大切なものでもあるんじゃない？ あ、私お昼ご飯届いたからこの辺で。じゃあね先輩っ」

「っ……」

不穏な情報だけ残して一方的に通信を切ったモモカ。後輩の傍若無人なふるまいには相応の怒りを抱いているらしく、リンは苦虫を噛み潰したような表情で静かに体を震



わせていた。

「手筈が狂うたか」

「だ、大丈夫です。少々問題が発生しましたが、大したことはありません」

「……えっ？ 何、どうして私たちの方を見るの？」

唐突に視線を向けられた生徒たちがおもむろにたじろぐ。面倒ごとの気配を感じとつたらしい。

「ちようどここに各学園を代表する、立派で暇そうな方々がいますので。ええ、心強いです  
すね？」

「……えーつと」

「さ、行きましょう」

「ちよ、どこに行くのよ!？」

矢面に立たされたユウカが言葉を濁そうとするも、リンは無言を言わず全員を外郭地区まで連行した。



「なによこれーっ!!」

着弾した砲弾の轟音、まくりあがるアスファルト、土煙。がけたたましい銃撃音の飛び交う中、ユウカは抗議の声を上げた。

「なんで私たちが不良たちと戦わないといけないのよっ！」

「サントウムタワーの制御権を取り戻すためにはシャーレの部室奪還が必要ですから……」

風紀委員の腕章をつけた少女、チナツがユウカを冷静に諭す。

「それはわかってるけど！　うちの学校じゃ生徒会所属でそれなり扱いの私が、なんでこんな……！」

なおもぶつくさと不平不満を漏らすユウカ。彼女の主張は尤もだが、今は場所が悪い。ここは戦場だった。

タタタタツ、と銃声が響き、凶弾がユウカを襲う。

「い、痛ったあ！　これ違法JHP弾でしょ！」

「ユウカ、伏せてください。それにJHP弾は違法指定されていませんよ」

黒髪の少女、ハスミが冷静にユウカを窘める。ユウカと異なりハスミは完全に状況にこの戦地に適応していた。

「うちの学校じゃこれから違法指定されるの！　傷が残ったらどうするのよ」

「ともあれ今は先生を守ることが最優先。部室奪還はその次です」

「ハスミさんの言う通りです。先生はキヴォトスの外からいらした方。銃弾一つで命にかかわる恐れがあります」

チナツがハスミの主張に同調し、ユウカもすぐに頷いた。

「分かっているわ！ 先生は戦場に出ないで安全な場所にいてくださいね！」

だが、あの梟が戦場で女子供に守れているだけの軟な男であろうか。いや、そんなはずはない。

「否、心配には及ばぬ。戦場など庭同然よ」

「ええっ！ 先生自ら出るんですか？ まあ、先生ですし……」

梟の発言に思わず否を唱えようとしたユウカだったが、明らかに常人離れた梟の体躯を視界に収めると、まあ大丈夫かと考えを改めた。

なにせこの梟、明らかにただの老人ではない。傍にいただけで感じ取れる威容は、その巨軀だけが理由ではないはずだ。

「分かりました。これより先生の指揮下に入ります」

「生徒が先生の言葉に従うのも道理ですね。よろしく願います」